

スポーツ・学生・子ども 新たな関わり方を探して

SPORTS COMMUNITY
NO. 2
number two

WILD359ers 小池 智昭



我々は、スタッフが学生であるがゆえの未熟な面を真摯に受け止めている半面、WILD359ers ならではの+αをプログラムに最大限盛り込んでいる。それが「距離感」である。

①子どもとの距離感

活動の中で私たちはお互いをファーストネームやニックネームで呼び合う。ここには双方の距離を縮め、コミュニケーションを取り易くするという意図がある。年は離れていても友達みたいな不思議な関係、そんな距離感が自然と出来上がっている。子どもが萎縮することなく伸び伸びとスポーツができる空間というものを考えた時に、1つの出来事に対して共に一喜一憂してくれる仲間が沢山いることは欠かせない要素であると思う。私たちはコーチでもあるが、仲間にもなれる。伸び伸びとスポーツができる空間を提供する上で、この距離感が非常に生きていて感じている。

②保護者との距離感

WILD が地域に根付いた1つのコミュニティとなるために、保護者の方との関係の重要性というものを忘れてはいけない。WILDの活動中、お父さんは一緒に汗を流し、お母さんは子どもの姿に注目しながらも、女性スタッフと「あのスタッフかっこいいよねえ」なんて他愛もないことを話している。そして、試合の時には子どものプレーにハイタッチでスタッフと喜びを共有し、試合の感想などをネットの掲示板で話し合う。子どもだけでなく、家族にとって身近なWILDでありたい。そう願いつつ、私たちは保護者の方と接している。

③スタッフ間の距離感

私たちスタッフのほとんどが学生であり、学年の差はあるとしても基本的には対等の立場である。それゆえにミーティングの場ではスタッフ全員に意見する権利があり、時には運営方法や指導方法を巡って本気で衝突することもある。それらも含め、活動の中で日々与えられる課題

に対して解決策を模索し、まずは実践に移してみることができる柔軟性を持っていること。これがスタッフにタテの距離が存在しないWILDの強みである。

ここからはスポーツの普及という観点からWILDの存在意義を考えていきたい。去年の春、近隣の小学校の体育のサポートに行っていた時のことである。授業中つまらなそうにしている女の子がいたので「体育好き？」と質問したところ、「嫌い。できないから。」という返事だった。やっぱりと思うと同時に、この子たちが運動嫌いになるきっかけは何だったのだろうと考えた。その時、今の日本には子どもがスポーツを上達させる場所、体を鍛える場所はたくさんあるが、自分に合ったスポーツを探す場所、スポーツを始めてみる場所、好きになるための場所というものがないのではないかとこのことに思い当たった。

私たちは、運動が得意な子、苦手な子、スポーツはやってみたいけど、どうしていいか迷っている子、土曜の午後に暇だから来た子、自分の居場所が見つからない子…どんな目的を持ってきた子であれ、無条件に肯定してあげることから活動は始まると思っている。そして、その子の個性を見つけ、スポーツの中で生かしてあげること、そういう過程を通してスポーツの魅力を伝えていきたいと考えている。

サッカー人口、野球人口の増減の議論をする前に、どんな形でスポーツをする子どもの人口を増やすことが最も優先されるべき課題ではないだろうか。私たち WILD359ers は、そのための空間を子どもに提供する存在の1つでありたいと考えている。フラッグフットボール、あるいは fun-土の種目を通じて様々な選択肢を提示してあげたい。また、日々の練習を通して将来選べる選択肢を増やしてあげたい。それがゆくゆくはスポーツの普及に繋がることを信じて…。

今回は、WILD359ers の将来像と子供たちの未来についてです。お楽しみに !!
ご意見、ご感想などありましたらホームページの掲示板までお寄せください。

http://www.geocities.jp/wild_359ers/index.html

また、体験も随時受け付けておりますので、ご希望の方は wild_359ers@yahoo.co.jp までご連絡ください。